☆わたしの意見

神戸を新しい流通、情報のセンターに

秋田博正
（正興産業KK取締役社長）
（神戸経済同友会代表幹事）

この度、神戸経済同友会の代表幹事を仰せつかりましたが、私は若い経済界の人々にもできるだけ多数に同友会に入会してもらい、既成の財界人と若い経済人との接点の役割を果たし、両者の力を結集した働きをしたいと考えています。従来神戸経済同友会としては比較的手薄でありました阪神間にも志を同じくする人々によりこの度「阪神間特別委員会」ができて、阪神間の財界人にかなり加入していただけるのは大変心強く思います。

創始の精神をかえりみながら今日の而も神戸の経済同友会を考えてみますとき、何よりもまず自由な立場で若さをもって意欲的に物事にぶつかって勉強することが大切だと思います。かつその結果としては意見も発表したいと思います。

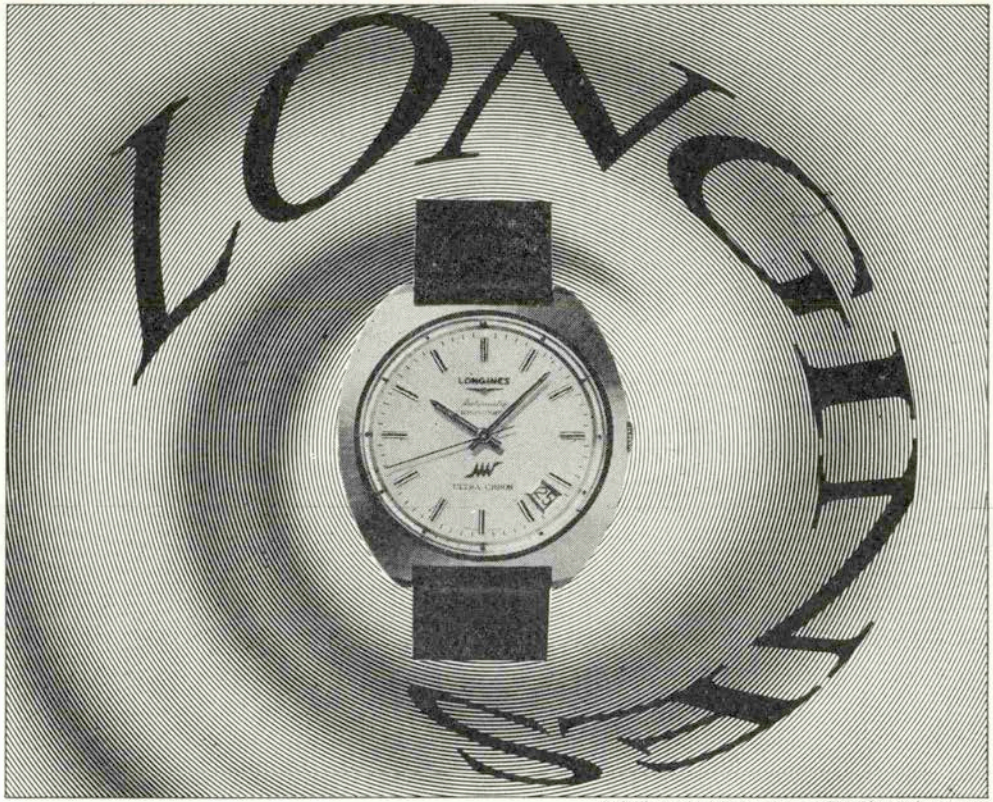
現在の神戸には地域的な制約もあり、これ以上の工場の立地は困難でしょう。そこで港、新幹線、関西新国際空港を軸とした海・陸・空一体としての人的、物的交流の要衝、あるいは新しい流通、情報のセンターとなるようないき方が神戸に最も適した道ではないでしょうか。

そうなるためには神戸単独だけでなく、大阪、播州、阪神間、京都など近接の諸都市と結んで総合的な経済圏をつくり、それぞれが機能的に活躍すべきだと思います。

関西新国際空港につきましては、騒音公害などにももちろん十分な配慮をすべきですが、これを単に感情論としてとらえるよりも、あらゆる角度から検討し、かならず技術的に解決するといったいき方が大切だと思います。

ここで新聞、その他のマスコミにお願いしたいことは公害などの問題について糾弾したり、一方的見解のみを掲載するのではなく、加害者、被害者双方の見解を十分にのべさせて、資料も用意して、それを住民や関係者からいろいろな角度から理性をもって十分に検討してもらう場をぜひ提供してほしいものです。

最高のものを厳選する人に——ロンジン



ウルトラクロン・クロノメーター ステンレス側皮付(No.8355) 105,000円

スイスの伝統にはぐくまれたアートの感覚と最新のメカニズムが、この斬新なデザインを生みだしました。
世界のエリートに信頼され、最高のものを厳選する人々に愛用されてきました。現代を生きるあなたにふさわしい時計を、ロンジンの中からお選びください。

LONGINES
特約店
美田時計店
元町店・元町三丁目 TEL.33-1798
三宮店・さんちかファンシー・タウン TEL.33-8798

随想三題

アフリカのホテルで

川口盛之助
〈大阪塩業KK取締役社長〉

「世界で最も有名なホテル」をご存じでしょうか？

それはアフリカのマニヤにあるトリートップスホテルです。何しろその肩書にちゃんと The Most Famous Hotel in The World と書いてあります。

ケニアは赤道直下でも殆どが高地で、首都ナイロビも、猛獣たちのいるサバンナも皆、海抜千数百米、そのため夏の神戸よりずっとしのぎやすいと思います。

このホテルはナイロビから三時間、大英帝国支配時のままの豪華な「本館」から更にジープで十分、森と野原にかこまれた涼しい「別館」です。

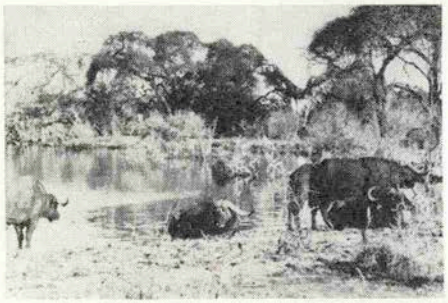
字のとおり大きな樹の上に建てられたコッテイジで、まわりに集ってくるさまざまの動物たちを眺められるようになっており、少々はスリルもある変ったホテルです。

今のエリザベス女王が、ここの階段を『登るときは王女だったが下るときは女王だった』——即ちお泊りの夜、父君がなくなられたというエピソードがあります。

むろんホテル代は相当高くつく代りに、もし当夜アフリカの四大猛獣（象、サイ、水牛、カバ）を見られなかったら宿賃はお返しする規定だそうです。

その為か私の泊った夜も、バタバタ廊下を走る音につづいてボーイさんが突然、ドンドンドン。「象！（エレファント）」「象！」。…寝入ったところで又ドンドンドン。「サイ！（ライノ）」「サイ！」と起こしてまわり、なかなか眠らせてくれません。

動物が集まるタネは、このホテルの付近が若干湿地帯でそこへ時々塩水をまくらしく、彼らはその塩分を求めて日毎夜毎やってくるようです。



マンヤラ湖のバッファロー（アフリカ水牛）

夕方水牛（バッファロー）の大群がやって来ました。アフリカ水牛はアジアのと違って角（ツノ）が大きく、仁丹帽（ナポレオン）を横にかぶったような形で、すごくドウモウな面つきです。殊にボスはその角がコケでも生えているように青さび、体軀はまた特に雄大で一見それとわかります。

そのときその凄いのが二頭、やや離れたところから長い間じっとニラミ合い、やがてジリッジリッと近よってきました。すると別の老いた一頭が仲介役のように二頭を群の外に誘い、そこで改めて角力のように向いあうや、バン！という猛烈な角と角とのぶっかり合いから始った壮絶な一騎打。バンバン、という角の音。皮に喰いこむ角、もつれあう角。血斗、手に汗にぎる十五分でした。

そして逆に一方がぐたっと弱まり、頭を地につけるとその勝負は終りでした。敗者はひとりよたよたと森の方へ去ってゆきます。勝者は血だらけの角をあげ悠々とこちらへ来て塩の泥をなめ始めます——すると敗者を追って森へ向っていた数頭が、何とくるりと向きを変え勝者の方へやってくると、何となく彼のまわりに集ってペロペロと泥をなめ始めました。

もう殆ど撮影も難しい夕暮の光の下で、カメラをおいてほっと一

息したとき、傍らの友人がぽつんと一こといいました。

「やっぱり男は強くなけりやイカンなあ」

最後の航海を終えて

北　和子
〈商船三井神戸診療所看護婦〉

ブラジル丸船上で同僚看護婦さんと。筆者（右）

看護婦になり、そして船に乗り出してから早いものでもう七年を数えます。はじめは南米への移民船でした。当時は女性といえば看護婦だけ。余り女性であっては困るとか恋愛ご法度とかいろいろいわれて乗りましたが、とにかく夢中でした。

今乗っている南米航路の客船は看護婦のほか美容師、ウエイトレス、女子事務員など女性も二〇人位乗っていますし、乗組員同士、家族同様のつきあいです。

陸では決まった時間働いて、患者さんとしてしか対しませんが、船ではちょっとした熱ででも徹底的にお世話します。そういう面でほんとの看護婦というか、やりがいのある面もあります。

船は狭い社会ですから、不幸にして亡くなった時はこんなふうにしたら助かったんじゃないかといろいろ思い悩みますが、良くなった場合はすごく喜んでもらえて、ほっとして涙ぐむことも——。

外人のお客さんにはお年寄りが多く、健康には気を使います。夜中、何時起こされても良いようにして寝ています。夜中人が走ると自分の所ではと、ハッと目を覚ましたり……。事故が起きたときは何より気転が大切。医務室も狭く特別の設備もありませんが、船の中でできるだけのことをします。一家の主であるキャプテンの下、皆で助け合って船を港に寄せ、港には電報を入れ、救急車が待っているということも何度か。

一度船員さんがマストから落ち頭を打つという大けがをして、船はエンジンの振動があるので絶対安静ができない。近くの港へ着くのに二日間かかりました。その間つきっきりで祈るような気持で看病し、タンカで送り出しました。私たちがまた出て行く時、いろんなものをプレゼントして置いてきましたが、子の父親なのに未知の国の病院で一人、とても淋しそうで、後髪引かれる思いでした。

船は狭い中に人間がいっぱい。何処を向いても人がいるのですから、たいしたことでなくても例えば冗談一つでもすごく気になり、精神的に疲れてくることもあります。シンドイことといえばそれが一番ですね。

でも帰って来ると、やっぱりのんびりするのか、一週間位ボーッとして陸の仕事についていけず、南米ボケとかいわれたり。日本から南米へ行くと時計を毎日三〇分ずつ進めなければなりません。早く寝なきゃ早く寝なきゃと思ってせわしない。逆に帰る時は遅らすわけですからとてものんびり。それでも三カ月もの長い航海、折り返し地点のヴェノスアイレスに着くと、日本の気候とも似ていてスキヤキ・パーティで息ぬき。それから大西洋越え太平洋へ出ると海の色から空気のニオイまで違い、ああこの海は日本へ続いてるんだなあとほっとしたり。

でも十二回目の航海を終えて、船に乗るのももう止めようと思っています。未練はすごくありますもっと若くて家庭の事情もなければもっともっと乗りたい。人間って我ままなんでしょうか。乗ってる時は逃げ出したいなんて思うこ

ともあるけど、下船してしまうと、嫌なことも全て楽しい思い出となってしまう。海もきれいだしスモッグもなく、なつかしい人々とも会える。船はそういう魅力ある場所です。

海を見に

伊勢田史郎
〈詩人〉

旅といえるほどの旅ではないが一泊二日ていどの小旅行にはときどき出かける。四月には篠山へ出かけた。五月には鳥羽の海を見に行く。三月のはじめには荒れ狂う山陰の海を竹野の辺りに見る予定だった。誌友の海尻巌を豊岡に訪ねたのが三月六日土曜日の暮方。雪模様の灰いろの空が何かもの問いたげだったが、酒を酌みかわしはじめた頃から、はらはら、といった感じで雪が降りはじめた、同行していたのが詩誌「輪」の仲間中村隆、なかけんじ、直原弘道、岡見裕輔の酒豪連なので、徳利はかたっぱしから空になる、主人の心ずくしの蟹すきをつつきながら飲み、語り、そして飲んだ。窓の外の雪は夜びいて降りつづけた。

雪はやはり、はらはら、といった感じで降りつづけていた。朝の中庭は石も樹もなかば雪に埋って白く、しいんとしていた。

朝はやくから主人のたててくれた風呂にはいって、また飲み、語った。荒れ狂っている冬の海。誰の頭の中にも、そんな風景が鮮明に、現実そのものよりも鮮明に出来ていた。と、わたしはそう思う。だからこそ、わたしをも含めて彼らの論争は激しく何時までも果てることがなかったのだ。

そんな激情をやわらかく包んでくれたのははらはらと降りつづける雪であり、主人のあたたかい智慧であった。海尻はわたしたちを東に乗せ丸山川を遡り出石の町に誘った。川沿いには柳が影絵のように連っており、雪は斜めに間断なく降りつづけている。荒涼たるとか、索漠とした、とかいった言葉が、ふと頭のはしをかすめる。葉落ち、くろぐろと、ささくれだち、不興気につったっている、これらの孤独な樹々。どろやなぎ（白楊）と呼ぶ種類のヤナギがあるが、河畔のこれら孤独な柳たちにこそふさわしい名だなあ、と思ったりする。実際はどういう種類なのかよく知らないのに。

出石は古い城下町。雪に埋れて眠っている。車を棄て、ひとっ子ひとり通らない雪の道を歩いてゆく

天日槍命（あめのひぼこのみこと）をまつる出石神社、国師沢庵和尚ゆかりの沢庵寺も雪のなかにひっそり身をひそめている。雪は霏々として降りやまぬ。石垣を積んだ巨大な望桜の上部には、古風な格調たかい大時計が嵌めこまれているのだが、これも秒を刻まず長い灰いろの眠りをむさぼっている。

出石焼、山本秀壺氏の窯を拝見する。純白の磁器が形ずくられていくまでの手作業の工程をじっと見ていると、何故か、また、しいんとなってくる。わが詩作の経過とひき較べているわけではないのだが、繊細な花の模様を独特なメス状のへらで素材に彫刻してゆくいや、素材の一部をはつりとり花模様をかたちづくってゆくその作業の繰り返しは、銭になろうとなるまいと、孤独な人間の業の典型のように思えてきたりする。

出石そば（皿そば、わんこそばに似ている）を喰べながら酒を汲む、飲み、そして語る。雪は降りやまない。海尻巌のもとめに応じて、色紙に将もない金釘流の断片を書き、残してきた。

〝雪は淡し鰡ろの市に蟹の宴〟

怒り狂った冬の海はついに見なかった。いや、おまえはそれを確かに見てきた筈だ、という声が何処かでしてはいるが。

ある集いその足あと

A&Y
国際コミュニケーションサービス

本誌七ページでご紹介したA&Yの面々をご紹介しましょう。

①学歴②経歴③得意とするもの

★アリス・後藤（英国系二世）
①ステラマリス国際学校卒
②秘書
③ガイド、通訳、英語教授、翻訳
レセプショニスト、モデル

★川上也須子
①同志社大学、ペンシルバニア大学、ロンドン大学
②日本語・英語・デンマーク語の通訳、翻訳、レセプショニスト

★日下あや
①ロンドン・クロインド・テクニカル・カレッジ
②国際線グランド・ホステス
③英語・日本語

★岩崎幸代
①同志社大学英文科卒後一年半イギリスに。
②③現在英会話教師

★アルムート・ファン・デァ・ラーン（神戸生れのドイツ人）
②万博通訳サンヨー館、
③独語、日本語

★西光芳子（にしみつ）
①同志社女子大学英文科卒
②英語、同時通訳

★森川良子
①インドのボンベイで十年間滞在
②万博期間中、大丸で通訳。キャンベラ号で通訳。
③英語、通訳

★宮原和子
①小林聖心女子学院卒後英国留学
②同時通訳。万博期間中ラジオ・インタビュアーと通訳
③通訳、英会話教師

★焦　梅華（中国）
②万博協会通訳ホステス
③中国語（英語世界人口の1/4は中国人なので、これからは英語の次に中国語が絶対に必要言語になると思います。皆さんも大いに勉強して頂きたい。そこで私が何か皆さんのお役に立てば。）

★熊谷みさ子
①アメリカ・北カロライナ州の小さな大学に二年間留学
②万博アイビーエム館ホステス
③A&Yでは英語の通訳ガイドの勉強したい。でも翻訳の方が好き英会話教師もやりたい。

★渡辺百合
①小林聖心女子学院高等部→ステラマリス国際学校→海星女子学院大学仏文学科卒
②万博協会エスコートガイド・大阪国際見本市通訳、札幌オリンピック・コンパニオン
③英語・仏語

★長坂真治子
①神戸女子学院大学英文学科卒
②神戸シアトルYMCA交換留学のアシスタントリーダーとして渡米。万博富士グループ館ホステス
③英語のガイド、通訳、翻訳ほか札幌オリンピック通訳予定。

★洪瑪莉（台湾・来日三年）
①関西学院大学仏文学科四年
②万博フランス館ホステス
③仏語・英語・日本語・中国語の通訳・翻訳

★ソーナ・渡辺
①スステラマリス国際学校
②エアライン・グランドホステス
秘書、ガイド、モデル
③英語・日本語

（順不同）

ポートターミナルの事務所で

連絡先　A&Y国際コミュニケーション・サービス
神戸市生田区新港町第四突提ポートターミナル2F　TEL332572

English German Italian
French Spanish Portuguese etc

ベルリッツは世界のあらゆる国の言葉をお教えします

★もう一つの言葉をベルリッツ スクールで

1878年
創設当時の
ベルリッツ
語学学校

現在の
ベルリッツ神戸校
英語の小人数クラス

★1878年にニューヨークで創設された伝統ある語学学校で世界中に150校、日本には6校のベルリッツスクールがあります。

★ベルリッツスクールでは、英語のレッスンであれば英語しか話しません。最初から"聞くこと"と"話すこと"に重点をおき、"読む""書く"という順序でマスターする一番早道の教授法です。

●お急ぎの方は全没入コース
急に海外出張、留学、旅行の決った方等のための個人レッスン
1ヵ月間朝から夕方迄昼食も先生と共にという徹底的マスター法

●個人レッスン
前日の午後3時迄に予約できれば好きな時間にレッスンできます

●小人数レッスン
3～6人の小クラスです。

●無料レッスン
入学前に一度、ベルリッツメソッドによる授業をうけられます。

●お問合せ 授業料・詳細については電話でスチューデントアドバイザー迄

19

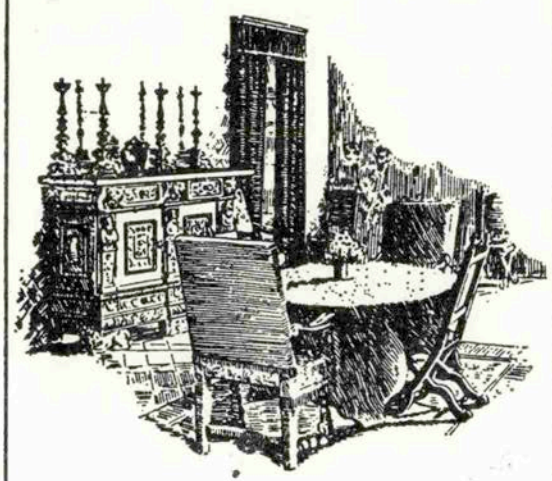
berlitz
世界最大の語学校ベルリッツ

ベルリッツ スクール オブ ラングェ ジェス

神戸校●生田区下山手通5ノ21 協和ビル (078)35－1583～5

大阪(06)341－2531赤坂(03)584－4211有楽町(03)214－2611渋谷(03)461－5201横浜(045)651－2891

家具・室内装飾・工芸品

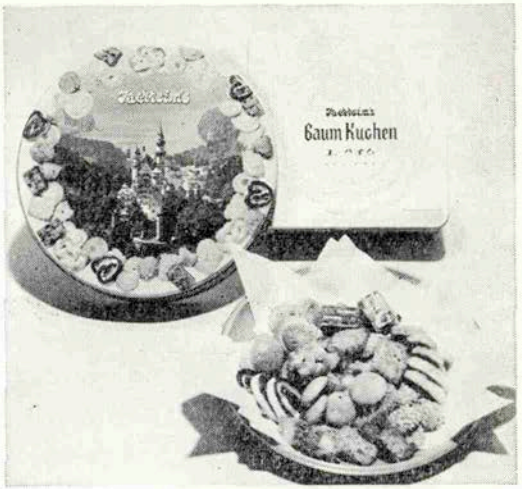


永田良介商店

神戸市生田区三宮町3丁目大丸前TEL神戸(39)3737(代表)

東京店・東急百貨店 日本橋店内1階TEL 03 (211) 0511
本店(渋谷)7階TEL 03 (462) 3180

お中元・ご贈答に
ユーハイムの自然の味を



ドイツ菓子
Juchheim's
ユーハイム

本社	三宮生田神社前	TEL (33)1694
三宮店	三宮大丸前市電筋	TEL (33)2101
さんちか店	三宮地下街スウィーツタウン内	TEL (39)3539
貿易センタービル店	三宮貿易センタービル地下1階	TEL (25)0139
さんプラザ店	三宮センター街さんプラザ地下1階	TEL (39)1896
心斎橋店	大阪心斎橋筋大丸前	TEL(252)0925
阪急三番街店	梅田阪急三番街地下2階	TEL(372)8823

□連載ずいうそ〈3〉

摩耶山幻想

——神戸ものがたり——

稲垣足穂　え・宮地孝

私が、当時は神戸東郊原田の森にあった関西学院中学部へ入学した時、校舎は完成したばかりであった。それまでは、正門をはいって右側の、その後は高等学部として使用された英国風の三階館が中学部だったのである。

新校舎の木材はすべてカナダ産とやらで、それが十月（オクトーバー）に入るなり紅と黄と褐色の見事な大饗宴を打ち拡げる。異国の木々の香り、三角屋根をおおうた赤いスレート、その斜面に居並んでいる教室毎のレンガの煙突、屋内はペイントとワニスの匂いに漲って、初めて中学生となった私の感覚をそそり立てたものだ。

私の教室は二階南側にあったが、背後の図画教室や習字教室には、北向きの真四角な採光窓が付いていた。教室の壁はクリーム色で、この上方にワニス塗の横桟があって、天井は白であった。北向きの採光窓は宛（さなが）ら活（い）きている額縁であった。そこには、背後の摩耶山の一角がカットされ、アカ

マツが疎らに置かれた芝地を、雲々の影がひっきりなしに匍い上っては、その向う側に吸い取られていた。私は何いうこともなく、その柔らかな縁の斡面に、日光を受けて燦めくヨロイを描いていた。勿論かずかずの武具や旗さしものがそこに参加していた。かってこの山が戦場になったと聞いていたことの反映であろう。でも摩耶山の合戦とは何か？嘉吉元年六月二十四日、赤松入道満祐、京都館において将軍義政を殺し、郷土播磨へ走ったのち、大軍の追手が西に向ったことを指している。

赤松一族の誰やらが要撃すべく摩耶山に陣をかまえた。これは映画の戦争場面のような子供騙しでない。摩耶山下から西ノ宮、尼が崎方面にかけて敵身方の戦死体が累々と横たわり、そのあいだに隙間がなかったというから相当なものだ。こうなると、赤松勢のヨロイや将具が、学校の北向き採光窓がカットしている芝地で、日光を受けて煌めいたなどとは少し可笑しい。つまりそんな高所で戦闘が行われるわけはない。又、何用あって重い武器を身につけた軍勢が、そんな急斜面を往復する必要があろう。

当然として、ワニス塗の額縁の中に赤松軍を描くのは間違いだということになった。それは白墨消しによって抹殺された。入れ代って登場したのが「魔の城」である。

山上の天上寺からゴーン、ゴーンと鐘の音が、春の紫ばんだ空気を細かく顫わして伝わってくるお昼前など、自分の頭の中に西欧的イメージが存したことが思い合わされる。何故なら、鐘は即ち梵鐘だと気が付くと、インドのお城や精舎が現われこれが西洋の城や宮殿に結び付くのは自然だからである。しかし実際は級友が作った数行の詩の影響である。霞に包まれた摩耶山の向うに魔の城があって……それが何とかして……何とかだというのだったが、その感じは確かに自分の裡にもあったのである。

ここに一つのお伽噺があった。たぶんドイツ辺りの民話の翻案のように思われたが、自分が雑誌「少年」のページで読んで憶えているのは、次のような主旨であった。

ある所に、三人の姉妹とそのお母さんが住んでいた。姉の二人は母親と結托して、いつも末娘の「小糸」をいじめていた。「小糸」はハタオリの名人で、人々からほめられていたのがしゃくにさわっていたのである。ある日、意地悪の姉たちは妹を摘草にさそい、隙見て小糸を川の中へ突き落して、帰ってしまった。小糸は流され、しかし無事に、夜又姫の御殿の泉水にまで導かれて、命ばかりは助かることになった。彼女はそれ以来、夜又姫の館に女中として働いていたが、ある夜、大広間の片すみに立派な機織が置かれているのを見て、思わず駆け寄り、有り合せの銀色の糸を使って、威勢よくトントンパタリ、トンパタリ……時ならぬ夜更けのハタオリの音に館には大混乱が起こった。魔物どもは顔色を変えて、何事とばかりに夜又姫を先頭に、侍女やら家来やらがぞろぞろと行列を作って、大広間へやってきた。ところがみるみる、涼しい歌声を張り上げて一心不乱にオサを右左に飛ばしている小糸の手許に惹き付けられ、銀糸の中の模様と化してしまったのである王様はこの由を知って、日頃持てあましていた夜又姫を退治してくれたとあって、小糸に過分なほ

うびを与え、彼女は出世の糸口をつかまえた。めでたしめでたし。

私はこの童話のテーマを、春霞に包まれた摩耶山のかなた「魔の城」に結び付けた。即ちある日、魔の城の王様が大勢の家来をしたがえ、行列を作って山から降りてくるというのである。彼らにいったい何用があったのかは知らないが、まだその用向きを果たさないうちに、麓の館か小屋かに近付いたとたん、涼しい唄声と共に始まった小糸のトントンパタリに、電気に触れたように引っかかって、これもみるみるうちに銀糸の中の模様としてつかまってしまった！

魔の城の王様の行列は、いつか活動写真で見た「アリババ」の一場面と取換えても差支えなかった。そのフィルムの中に、鳶色の大きな岩々が打ち重っているつづら折を、山賊どもが馬を曳いて降りてくる所があった彼らは青やピンクや赤のよそおいをしていた。「パテェカラー」は上品な、落着いた色彩として評判であったが現今見られるようなカラーではない。極めて面倒臭い話だが、フィルムの一コマ一コマが丹念に毛筆で彩られていたのである。したがってそこに使用されているピンク、紫、青、赤等はいったん拡大されてスクリーンに投じられると、そのおのおのが持場のりんかくからはみ出て恰も水中のヒドラの運動にも似た、勝手気儘な色彩ダンスを演じるのだった。

こんな着色山賊の一群でもよかった。この良からぬ輩（やから）は、山合いのギクシャク道を下りてきて、やっぱり麓の家に近付くなり、小糸が操るハタオリに吸い込まれ、銀地の中の盗賊模様になるのでなければならなかった。

＊　＊
＊

摩耶山上の天上寺へ、私は一度、何の変哲もない山道を伝って登って行ったことがある。お寺の本堂の前に立ち昇っている雲のような香煙におどろいた。ではそこからの展望は……これは勿論す

ばらしい。眼下の海は、ビリヤードの緑色のラシャのように、その所々に大小の船々をばら撒いて、平べったく一面に、一つのしわも見せないで打ち拡がっていた。自分は、その水平線上からの月の出を頭に浮べていたように憶えている。その月は、冬ならば生駒山の北から夏にはずっと南寄りになるのであろうが、どっちにしてもそこには陸地が邪魔をしているので、「海から昇る月」ではない。でも私はムリにも、すぐ眼の先の水平線から差し昇る月として、それを捉えたかった。パステル画、水彩、油彩、切紙細工、今日に到るまでいろんな変奏曲として残っている「月の出」は、ここに根拠を持っている。

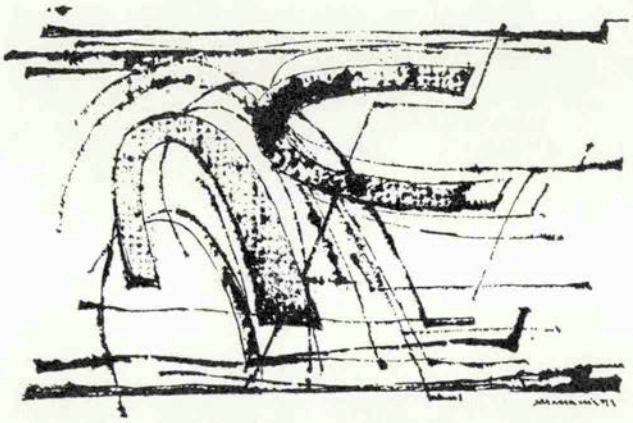
月と言っても普通の円盤（ディスク）でない。いわば輪切り大根のようなもの、もしそれが水平線から背だけを見せているものならば、カマボコの一片といった所だ。赤いカマボコの切れはし。したがって海面の波もその一つ一つが積木で、上面は赤く彩られている。私はこの構想を、奥平野の川岸にある友人の家の地下室で絵にしたものだ。「地下室」というわけは、その家は川堤を利用して建てられていたから、玄関を入って階段を降りた所が、つまり一階だったからである。この薄暗い所に据えられていたイーゼルに向って、最初の「月の出」の筆を取ったわけである。カンヴァスは友だちのお古を使って、すでに描かれていた風景の上に描いたわけである。描き上げたばかりのナマナマしい絵を、注意しながら元町の文華堂へ持って行った。この画具店は、前に私の描いた未来派の「バルコニーの女」「空中世界」石膏製の傷病兵などを、その窓に出していた。自分はそれらが行人にどんな反響を及すだろうと愉しみにしていたのに、わづかに只の一夜を窓の内部で過したのみでいずれも姿を消してしまった。買手は会下山の下に住んでいたアスベスト商社の若い主人、菱谷文七（小林茂政）である。朝日支局の何某を向うに回して恋を争い、フランス帰りの美女画家、中村ヒトミを射とめたという艶福家である。

こんどの「月の出」も忽ち窓の中から消えた。買いぬしが菱谷文七であることはいう迄もない。只「月の出」が人目にさらされていたほんの短かい時間に竹中郁が通りかかった。彼は私の絵に何か特別の印象を与えられたのか、その後よくこの絵のことを彼の文章中に持ち出すようになった。先年、明石の木村栄次が私の「明石」の再版を作ったが、その折りに郁さんは自発的に数枚のカットを描いてくれた。その一つに「月の出」が取り上げられている。堀辰雄がやってきた時も、竹中は客人を案内して、文華堂の前を通りながら、「月の出」のことを説明した形跡がある。彼はついでに堀を元町横丁に伴うて、「ここはイナガキタルホがよく五加皮の立飲みにやってくる所だ」といって、そのシナ人の食料店を紹介した、酒場でも飯屋でもない、砂糖づけの果物や赤い袋入りの燻製や、そんなごちやごちやした商品を並べた只の店先である。只その日、店頭の柱に、「江南一枝春」と記した赤い紙が貼られていた。この次第を郁さんから聞いて、私は面白く思った。毎年二月頃になると、いまの一句を紅唐紙にスミの字で書いて、我が居室の柱に貼り付けるようになった。今年もその通りだった。しかしいまはもう剝ぎとられている。すでに青葉の季節だからである。

□ずいそう

山のある港

蘆原英了　え・南和好



神戸というと山が見える港を思う。

いまから四十年以上前に読んだ小説だから記憶がおぼろであるが、浅見潤氏の書いた小説にこんなのがあった。

神戸の女が東京に出る。そして散々若労して、結局、娼婦になる、それから悪い病気をしょって、故郷に帰ってくる。神戸の病院に入院するが、その窓から山を見る、そしてああ故郷へ帰ってきたという気がする。入院している間、毎日毎日、窓をあけて山を眺める……といった小説である。

私は妙にその小説を忘れない。こまかいことはすっかり忘れてしまったが、郷里へ帰ってきて山

を眺める時の感慨が私の胸にも迫ってきた。

私は東京生れではないが、ずっと東京で育ってきて、故郷といったようなものがない。だから故郷を懐しむような感想にあうと、一たまりでない。しかしこの小説では神戸の山が実に効果的に描かれていた。

いまはヨーロッパへゆくにも羽田を飛びたつようになっているが、昔は神戸港から欧州航路へ船出したものである。厳密にいえば日本の最後の港は門司であったが、みんな神戸から船に乗りこんだ。

私もいまから四十年近く前、神戸から日本郵船の照国丸にのりこんで、四十日近くかかってマルセイユへ着いた。

神戸から出帆する時、浅見氏の小説のように神戸の山々が最後のさよならをおくってくれるように思われた。これで日本とも当分さよならだなと胸が迫ってきた。そしてその後、ほんとうに強く浅見氏の小説が私の頭の中によみがえってきた。

それからずっと神戸の山々が好きになってきた。「山の見える港」——私にとって神戸はまさにそれである。

このところあまり神戸にいかないが、いくことがあっても、サンチカあたりしかうろつかないので、港などへはとんと御無沙汰している。

放送の用でサンチカへ何べんか足を向けたが、はじめサンチカといわれて何のことかわからなかった。サンチカといえばすぐわかりますよといわれても合点がゆかなかったが、なるほど三宮駅へ着いたら、サンチカはすぐわかった。たいへんな地下街であった。

われわれ大正時代のよき日をおくったものには、その青春はどこかで宝塚に結びついている。私もご多分にもれず、若き日には宝塚の大スターに憧れていた。そしてそれは天上の花のような存在であった。お嫁さんにもらいたいように思ったが、さてこういう人たちを奥さんにするにはいくらぐらいかかるだろうかと思った。当時のお金で月収五百円はなければお嫁さんにはもらえないだろうと思われた。

当時、大学出の初任給は六十五円、部長クラスで二百五十円、重役で四百五十円といったところであった。だから五百円の生活をするには、重役以上の収入がなければならないわけであった。大スターを舞台の上でのように華やかに生活させることは、当時の私にはとうてい出来ないことであった。

私は涙をのんであきらめないわけにいかなかった。強引にお嫁さんにきてくれとはいえなかった。

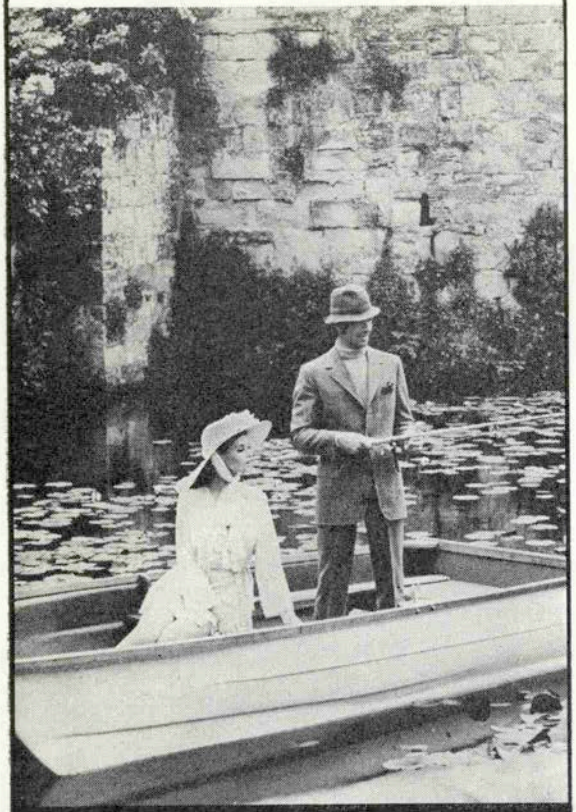
年去って往年の大スターは、三宮近くで小さなお店を開いているが、今も眼もまばゆいほど美しく、あでやかである。私はお酒がのめないのでそのお店には一人ではゆけないが、神戸を聞くとその人のことがあざやかに思い出される。

そして神戸は山と共に、いいところだと思う。

〈音楽評論家〉

〈筆　者〉

静かさの中で息づく格調ある美しさ



O-SHIBATA

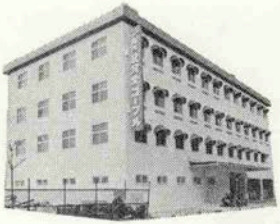
柴田音吉洋服店

神戸・元町4丁目南　神戸 34—0693

大阪・高麗橋2丁目　大阪 231—2106

味覚の愉しみ贈る悦び

ゴーフル



★長年ゴーフルをかわいがって頂きありがとうございます。おかげ様で今津に新ゴーフル工場を完成させて頂きました。今後とも品質・価格などいっそうの努力を重ねてまいります。よりご愛顧頂きますようお願い申し上げます。

神戸にそだって 70年

風月堂

元町3丁目 TEL㊴2412～5

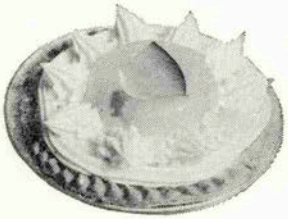
さんちかスイーツタウン TEL㊴3455

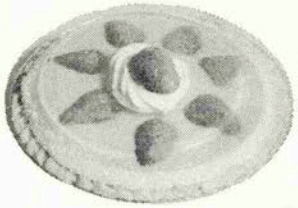
新発売

3種のタートがデビューしました。風味豊かな煉パイとまろやかなカスタークリームをベースに、マロン、ストロベリー、ピーチ、メロン等のフレッシュフルーツをミックスしました。
各 400円

●マロンタート
マロン&マロンクリーム

●フルールタート
メロン・ピーチ・マンダリン
パイン&ババロア





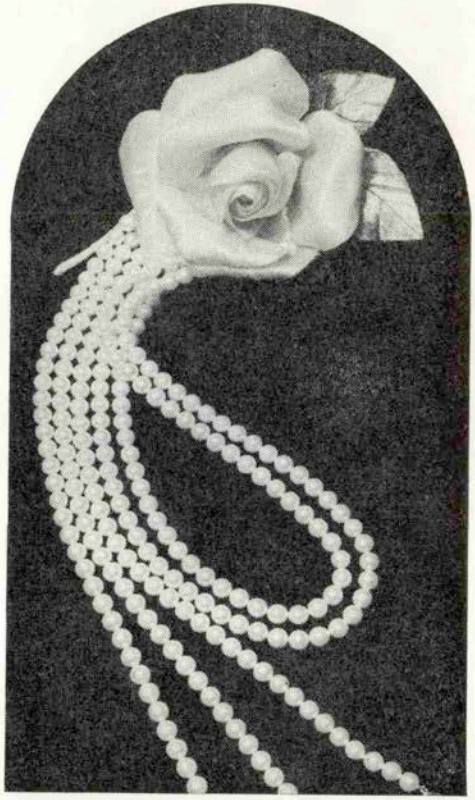
●ストロベリータート
ストロベリー・ストロベリー
リキュールゼリー&ババロア

北欧の銘菓

ユーハイム・コンフェクト

■本 社・工 場　神戸市葺合区熊内町1（市立美術館東隣）　TEL22−1164
■三宮センター店　神戸三宮センター街（洋菓子・喫茶・レストラン）　TEL33−2421
■さんちか店　神戸三宮地下街スイーツタウン　TEL39−3558

花の香にも似たパールを……



Kitamura Pearls

世界の人々に愛される北村パール

北村真珠店

元町通 2 丁目60　TEL. 33−0072